

Title	ヴァルミーの砲撃とマインツの攻略
Sub Title	Goethe and French Revolution
Author	鈴木, 泰平(Suzuki, Taihei)
Publisher	三田史学会
Publication year	1962
Jtitle	史学 Vol.35, No.2/3 (1962. 12) ,p.71(227)- 84(240)
JaLC DOI	
Abstract	It is a very well known fact what a great influence the French Revolution had on the formation of the German State and her people. However, it may be stated that there were practically no one who understood sufficiently the historical significance of the progress of the Revolution. During this period, it is said, that Goethe alone understood the world historical significance of the Revolution, but so far as his works are concerned, one cannot always say that he really had complete understanding. After all, for Goethe, it might be stated that, outside of pursuing the humanities, he had almost no interest in the historical events of his time. To understand and evaluate sufficiently the Revolution and its historical significance, it was necessary to wait for the emergence of the German Romanticism.
Notes	間崎万里先生頌寿記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19621200-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヴァルミীর砲撃とマインツの攻略

鈴木 泰平

序 説

フランス革命戦争が、世界市民主義と国民主義の微妙な結晶を形作り、その結晶の上にフランス国民国家とプロシヤによるドイツ統一が促されてきた次第は、今更論ずるまでもない。又このフランス革命戦争の持つ史的意義を論ずるに当つて、特異な役割を果たしたヴァルミীর砲撃に関しても余りにも多くの説がなされてきたことも特記すべきではない。本小論に於いては、革命戦争に従事したゲーテの従軍手記を手掛りにして、ゲーテに於る革命観とも云ふべきものを一、二指摘し、併せてゲーテに於る革命の史的意義を考えて見たいと思うのである。

一

革命戦争の発端については、本質的にはイデオロギーの対立があるにしても、戦争それ自体については、少くともフランス内の革命派の事態収拾を計る見地からの或る種の思惑が働いていたのは疑問の余地がない。⁽¹⁾プロシヤ・オーストリアに当初全く準備がされてい⁽²⁾ないまゝ戦争に入つた事情から見ても、このことは充分に首肯される所である。従つて

戦争の第一段階を見る限り、本格的な準備のないまゝで交戦状態に入ると云う十八世紀の通例の戦争には珍しい形態をこの革命戦争はとつていふことゝ云えよう。

ヴァルミーの砲撃は、この第一段階の云はば最後の段階に当る時の事件であるが、九二年四月当初のフランス国境の防衛線は、長くダンケルクよりバーゼルに亘り、第一線に投入し得る兵力は、三十万兵員徵募令以前に於て僅かに八万二千⁽³⁾を数えるに過ぎない。その編成を見ると、左翼は、ラ・ファイエット麾下の四万三千名が、ダンケルクからモンメデイに至る線を構成し、中央部は、ルツクネル指揮下の一万七千名がメッスに本営を置いて、モンメデイよりヴォージュ山脈の線に布陣してパリ街道を守備していた。右翼には、ピロン輩下の二万名がランドオ及びビッシュ峠並びにヴォージュ、ジュラの溪谷地域に展開し、総じて攻撃的隊形をとつてゐるものではなかつた。

これに対し、ドイツ聯合軍（プロシヤ、オーストリア、ヘッセン、ワイマール、バーデン、ハノーバー、ザクセン、ウエルテンベルヒ）を見ると、コブレンツに五千五百のヘッセン軍及びフランス亡命部隊及び四万二千のプロシヤ軍が駐屯し、それに隣り合つてクレールフェルトの率いる一万五千が居り、ライン一帯にはホーヘンローエの一万四千が駐留してブラウンシュヴァイク公が総指揮に任じていた。聯合軍の隊形は、確かにフランス軍よりも攻撃的であつたが、ブラウンシュヴァイク公とプロシヤ国王フリードリッヒ・ウイリヤム二世との意見の対立とポーランド分割問題とが早急な軍事行動を阻害していたのである。

聯合軍の行動は、七月三十日に至つて積極的になり、セダン・メッスのフランス守備隊の猛烈な抵抗を受けつつ、八月二十七日にはロンウィー、二十九日にはヴェルダン要塞を抜き、パリ進撃は極めて短時日の中に終結する見透しが立つに至つた。特にフランス側は、ラ・ファイエット將軍のオーストリア投降により全面的崩壊が予想された訳であるが、

聯合軍がマース河とライン河との連絡に時間を費いやしたため辛じて攻撃を支えることが出来た次第である。

ラ・ファイエットの投降後、フランスはデュームーリエ及びケレルマンの下に作戦を変えて、オーストリヤ領ネーデルランドに進んで聯合軍の連絡路を遮断し、更にヴェルダン奪還のためアルゴンヌの森林地帯を通つて中央突破を試みようとしたのである。プロシヤ軍は直ちにこの企図を知つて、デュームーリエ部隊の集結地帯に圧迫を加え、このためデュームーリエは、サン・メウールに後退し（九月十九日）、ケレルマンもこれに加つて、クロア・ゾー・ボアを経て来る聯合軍をアルゴンヌ森林高地で迎え討つ態勢をとることとなつた。此の際ケレルマン指揮下のフランス軍がデュームーリエの部隊に合流する以前にプロシヤ軍がランドルを衝けば、恐らく聯合軍の大勝利は決定的になつた訳であるが、ランドルに着いたのは十八日で、十九日に漸くフランス軍左翼に接触するに止まつていたのである。

プロシヤ軍は一方オーストリヤ軍とグラン・プレよりシャンパーニュ・プリーユーズの線で合流し、中央突破を試みたが、偶々ケレルマン軍はヴァルミー高地の一隅より猛烈な砲撃を加えたのである。

このヴァルミーの砲撃に対して、プロシヤ軍は昼間は応戦したが、モン・ヴロン高地にもあつたフランス軍の砲撃は極めて激しく、夜間に入つてその部隊が射程内にあるのを知つたブラウンシュヴァイヒは前進を停止せざるを得なかつた。プロシヤ軍は此の際後退すると見せてシヤロン駐在のフランス予備隊との連絡路に布陣したが、デュームーリエは、そのシヤロン攻撃に際しては逆にプロシヤ軍左翼を衝くこととし、ヴィトリ・ル・フランスアに出てシヤロンとの連絡の恢復に成功していた。フランス軍の防戦は、フランス外交の有利な展開に絶好の機会を与えるものではあつたが、それ以上の積極的な攻撃は希まず、こゝにプロシヤ軍は更にパリとの連絡路の遮断に出で、デュームーリエはマルヌ河に最後の拠点を見出す他はなかつた。ケレルマンが九月二十九日に一部隊を聯合軍の左翼に転進させ、媾和の機会を窺つ

たのは、此の場合であるが、プロシヤ軍の攻撃はその機会を与えず、フランス・ライン方面軍は、全面的な危機的状态に陥つた。しかし、ヴィロン將軍麾下のキュスチーナは、よくスパイエル、ウオルムス、フイリップブルグ等のライン主要渡河点を確保し、更にマインツの革命派の協力を得て同市の解放に成功するに至つた。

ブラウンシュヴァイヒがマインツの攻略を図つたのは、十月二十四日であるが、十二日にはコブレンツを経てフランクフルトを突破した後、全軍の総引き上げを命ずるに至つた。

ヴァルミーの砲撃を中心にした革命戦争は、かくて一応一段落となり、以後九三年三月まで国民公会派遣の委員によるベルギー占領地の経営⁽⁴⁾を見る段階に入るのである。

しかし、ベルギー占領地の経営は、戦局が決定的段階に入らなかつたため永續するのは期待出来ず、間もなく三月に入るとオーストリアのウルムゼルは、マンハイムより行動を起し、二十一日にはラインを渡つてフランス軍右翼を圧迫し、ウオルムス、スパイエルは奪還されるに至つた。

他方、フランス軍は別動隊によつてナミュール、トウールネエを経てジュマツプにオーストリア軍を破り、モンス、ブリュッセル、リエージュ、イープル、ブルジュ占領の素地を作つたが、キュスチーナの主力部隊がラインから退却する以前にフランスの総兵力は五十万に達し、戦局の中心は明らかにマエストリヒトとマインツの攻防戦に變つていたのである。此の攻防戦からオーストリア軍司令官はザツクス・コーブルグ・ザールフェルトに變り、ウルムゼル、ホーヘンローエとの共同作戦も効を奏し、フランス軍は、マリヌ、ルーヴァン、ディルの線に押され、ティルモンより漸次包囲される形勢になつたが、この間、フランス軍は僅かにオーヴェルヴィンデンを攻撃したに止まり、主力はネールヴィンデンに大敗を喫する。デュムーリエが総退却を行うのは(三月十九日)、此の敗戦が原因であるが、ドワーエ総攻

撃の前に彼は革命政府と争い、非劇的な聯合軍への投降を行つてゐる。

これに対し、マインツでは、キュスチーヌ麾下のドワーゼが僅か二万三千名の兵力にもかゝらず七月二十三日まで四ヶ月抵抗していたが、五月より始つたエデンコーペン附近を中心とする戦いは急速に不利になり、七月始めにはザールブリュッケンより発した新任モーゼル方面軍司令官ウーシヤール將軍の救援も空しく、マインツも結局、聯合軍に奪還されるに至つた。

フランス軍の敗退については直接的には軍事組織の革命的な編成が不充分なことと、指揮系統の困乱が甚しいこと等が挙げられるのは勿論であるが、全般的には戦争準備の不徹底、軍補給の致命的な欠陥⁽⁶⁾が最大の原因であるのは縷説を要しない。

二

革命戦争が九三年に入つて更に激しく展開された原因としては、ルイ十六世の処刑、九二年八月に於ける第二革命⁽⁶⁾の進展に伴うヨーロッパ諸国の革命に対する評価の変化等⁽⁷⁾が挙げられる訳であるが、何れにせよ革命に伴うフランス・パトリオティズム⁽⁸⁾の出現と革命軍隊の強大化がヨーロッパ諸国に大きな衝撃を与えたことは確かであつた。

ゲーテが斯様な豫測し得ない変動を促した革命戦争に従軍したのは、このヴァルミーの砲撃とマインツの攻防戦とであり、彼はこの戦争を通じて親しく革命戦争の実相を知り得た訳である。此の意味に於いて、ゲーテの従軍手記とも云ふべき滞仏陣中記 (Campagne in Frankreich) とマインツ攻圍 (Belagerung von Mainz) は少からぬ暗示と将来との展望を与えてくれると云えよう、処で、この従軍手記は、勿論嚴密な意味での原史料と云う位置を持つものではない。

い。これを材料として一つの判断を下すには相当の注意を要する訳であるが、ゲーテ従軍の動機と背後の政治情勢に思いを致すならば、存外史料としての利用価値が生ずるものと見て差し支えないと思われる。

革命の展開に伴つて、ドイツが如何なる反応を示すかについては、革命の当事者も勿論充分な見透しを持つていた訳ではないし、又ドイツも革命運動の評価とその国際的反響について確たる判断を持ち得た訳ではなかつた。恐らくドイツが革命を或る程度現実に問題にするに至つたのは、封建制度廃止宣言の南ドイツ諸国に於ける適用の問題と多くの逃亡者の処遇とである。

逃亡者の処遇に関しては、南ドイツ諸国は概ね好意的であつたが、亡命政権の樹立や国際的な反革命戦線の結成に主導的役割を果たすに至つて少くとも南ドイツ諸国は、明白な態度と立場をとらざるを得なかつた訳であるが、逃亡者の動きと結んで偽アッシニア製造に国際的な組織を設けるに至つて、その立場は明らかに反革命的になつていた。更に南ドイツ諸国が、一六四八年のウエストファリア条約により保証されていたフランス領アルザスに於ける土地所有、司法、徴税上の特権を封建制度の廃止宣言によつて剝奪されるに至つて、決定的な反革命の線を出すに至つたのである。特に直接利害関係の深いバーデン、スパイエル、ウオルムス、ヘッセ、ダルムスタットは重ねてその宣言の適用除外を求めたが、反対にフランスが亡命貴族の送還と保護政策の撤回を求めるに至つて両者の間には全く媾和の機会がなくなるに至つた。⁽¹¹⁾ ヴアルミーの砲撃に至る戦争の動機には、斯様な問題が介在していたのは恐らく確かであろうと思われる。又ゲーテの主君ワイマール公カール・アウグストの参戦動機も此れ以上に出るものとは思われない。従つて、此の段階にある限り革命戦争には絶えず媾和の機会もあつた訳であり、革命戦争の展開が存外急速になされず寧ろ緩慢なるテンポで進行していたのも充分理解される所である。

革命戦争は、しかしヴァルミーの砲撃とジュマップの戦を契機として「共和国フランス」の再検討を促して止まず、当然バリーに於ける革命政権のあり方乃至は革命の原則そのものに大きな検討を行わさせるに至つた。

人口十萬足らずの国勢振はざる一王国ワイマールの宮中顧問官として十年に亙る治世により「ワイマールの諸事引受人」⁽¹²⁾の名を得たゲーテが、八六年以来のイタリア旅行から暫く帰国したは九〇年六月の頃であるが、当然彼は三都会の分裂騒ぎから九一年の革命憲法の制定及びブルジョアジーによる政権樹立を知つていた訳である。しかし、この段階に於けるゲーテの革命観は何等記録にされて居らず、少くとも此の限りに於いてはゲーテは出来事をフランスに於いての新しい事態の展開程度としか見ていないと云う他はない。恐らくゲーテが、革命を真に認識するに至つたのは、彼の従軍によるものと思われる。又ゲーテの目に映つていたのは、恐らく十八世紀流の戦争であり、革命フランスの認識は到底ないと思う他はない。従つて彼の従軍動機はワイマール国王の意向に従つたまでのことで、格別な動機を窺ふことは出来ないように思われる。

ゲーテがマインツの前線からヴェルダン要塞を経てアルゴンヌ森林に入り、ワイマール公国の聯隊が駐屯しているヴェルダンとマース河に近いシャルダン・フオンテーヌに入つたのは九二年九月六日であるが、十二日にはランドル進軍に加わり、グラン・プレの野営の一員として十九日にはマツシーシュに入り、こゝでシャロン街道をはさむフランス軍との戦闘に入るに至つた。ワイマール軍は、此の戦闘に於いて前衛部隊として行動していたため、ヴァルミー高地からの猛烈な砲撃下に置かれ、退却せざるを得ない状態に陥つた。⁽¹⁴⁾ゲーテは、此の思いもよらぬ敗戦によつて始めて革命フランスの動きを知つた訳であるが、九月二十日夜の将校集会の席上、求められるまゝに現状に対する意見を開陳し「こゝから又今日から世界歴史の一新時期が開かれる。そして諸君はそれに参加したと云うことができる」⁽¹⁵⁾と述べたのである。

る。

ゲーテの此の言葉は、フランス革命に対する世界の目を開かせたと云う意味に於いて、又ゲーテ自身が革命に対する積極的評価を下したものとして多大の注目を浴びたものであるが、この言葉が採録されている対仏陣中記には、数ヶ所に亘つてフランス国内の動きに言及している所があり、当然そこにはニュアンスの違いが感じられるのである。その中で特に注目を惹くのは「八月半ばの悲しむべき事件がパリから伝えられた。それらはブラウンシュヴァイヒ宣言に反して王が捕われて、王位を剥奪され、罪人として取り扱われたことである⁽¹⁶⁾」と云う一節であるが、これによるとゲーテは、八月十日革命以前の動きに関しては、立憲君主主義の枠内に於ける改革運動を首肯しているものの、八月十日の革命とそれに伴う王権停止に関しては反対の意向を明白に持つていたと断定出来るのである。それにもかかわらず、ゲーテが敢えて世界史の親しい到来を語つたのは、ヴァルミーの砲撃を通じて、革命に於ける新しい時代転換を直視し、その史的意義を強く感得したからに他ならない。此の意味に於いてヴァルミーの砲撃は、ゲーテの革命観の転換を促した現実的な動機と云うことが出来るのである。

このゲーテに於ける革命観の変化は、当然彼のフランス国内に於ける動きについての認識と理解が前提されていないが、八月十日革命の求めるものについてどの程度ゲーテは共鳴しているのであろうか。これについての判断は、陣中記に於ける記事による限り極めて否定的であり、現実には彼はあくまでも王政主義の枠を出ていないように思われる。

ヴァルミーの砲撃後、一週間を経てゲーテはクネーペルに「私は多くのことを学んだ。私は私の目で全てのことを見

られたのを實際喜んでゐる」と書き、更に妻クリスチアーネに「この戦いは、歴史に於ける痛ましい姿をカットするであろう」⁽¹⁷⁾と書き送つてゐるのであるが、ゲーテは其の後、トリエル、コブレンツを経てデュッセルドルフのヤコービイの館に到着し、九三年二月にはワイマールに帰国するに至つた。この手紙に関する限りゲーテは革命への認識を更に深く持つたことが窺われるのであるが、それ以上の材料は来るべきマインツの攻防戦を待たなくてはならない。

ゲーテが再び征旅の人となつたのは九三年五月の頃で、彼が向つたのはマインツである。「マインツの攻囲」は、この五月より七月に至るマインツの攻防戦に於けるゲーテの動きを記してゐるものとして、又「滯仏陣中記」と其に彼の革命観を知るのに格好の材料であることは云うまでもない。ゲーテはこの手記の中で精細に攻防戦の具体的様相を書いてゐるのであるが、特に「私の以前の予言も亦話題に上つた。『ここからそして今日から世界歴史の一新時期が開かれる。しかも君等は自分達がこゝに居合はしたと云うことが出来るのだ』と云う私の言葉を皆は繰返えした、この予言が単に一般的な意味通りと云う所ではなく、實に一一文字通り厳密に充たされたのを見て皆は大いに不思議がつた」⁽¹⁸⁾と述べて自分の史眼の誤りないことを誇示してゐる所がある。ゲーテは更に手記の最後の部分に於いて「さて、これで私は筆を濶かう。そしてかの世界的宿命―吾々がその同じ宿命の波に吞まれる、と云つて悪ければ浸されるまで、尚十二年間吾々を脅かし続けたあの宿命―の考察には互るまいと思う」と述べてゐるのであるが、この二点に関する限りゲーテの革命観は揺ぎのない積極的な肯定と革命運動による時代轉換の史的必然性とも呼ぶべきものに満されているように思われるのである。

三

さてこゝで先づ問題にすべきは、マインツの革命戦争に占めている意義とゲーテの参戦動機とであろう。マインツの有する戦略的重要性については、モーゼル方面軍団付委員により指摘されてように、⁽¹⁹⁾ノール戦線と共にモーゼル戦線はパリ防衛の重要な関門であり、その防衛は直ちにパリの運命に通ずるものであつたが、マインツのみは、モーゼル軍の主力部隊から切り離されて孤立して居り、その防衛如何がモーゼル軍団の向背に響く立場にあつたのであるが、マインツの防衛に関しては、何等積極的な対策が立てられず、⁽²¹⁾常に革命精神の旺盛なマインツ市民との共同によつて辛じて支えている状態であつた。従つてマインツの解放如何は北部方面軍全体の関心事であり、キュスチーナ將軍以来の作戦は、常にその解放を求めて行われている次第であつた。特にマインツが五月下旬以来聯合軍の重囲下に置かれて以来、革命政府はキュスチーナ將軍の帰還を求めて実情を把握すると共に⁽²²⁾モーゼル軍団司令官の更迭を行い⁽²³⁾其の解放を期していたのである。換言すれば、マインツは革命フランス存立の向背を決する要めとして考えられて居り、その解放には異常な情熱が湧き立てられていたのである。この攻防戦は同年七月聯合軍の勝利によつて終はり、ゲーテはその勝利を確認した上で手記を書いているのであるが、破は聯合軍の勝利にもかかわらず、マインツの攻防を通じて革命的イデオロギイの意義をヴァルミーの場合以上に強調しているのである。ゲーテがマインツ攻防戦に従軍した動機については、直接吾々は論証し得る材料を持つてゐる訳ではないが、恐らくヴァルミーの場合を再び確認し、革命フランスを更に深く検討しようとする意向によるものと思われる。この点に関しては、ゲーテは手記の中で「それ故、人々は、マインツ委員会の属している党派をして政権を掌握させるに至らしめた、あのパリでの最近の革命が実は予想よりも早い開城の原因ではあるまいかと云う推測を懷いた⁽²⁴⁾」と述べて、その革命の有する性格と動向を無視し得ないものとしてゐるのであるが、この記述による限りゲーテの革命観には現実の事態の観察が大きな影響を与えているのは確かなように思われる。パリでの

最近の革命とは云うまでもなく五月三十一日、六月二日の両日に亙るパリ・コンミュヌとジャコバン派のシロンド派へのクーデターであり、このクーデターによる革命政治の質的変化⁽²⁵⁾については充分なる理解がゲーテにあつたものと見てよいのであるが、しかし革命のより民主的社会的展開が如何なる世界史的波紋を投ずるかについては、どの程度理解があるのか詳にし得ない所である。恐らく彼にとつて確認出来たことは、君主制の時代が重大な転換期にさしかゝつていくことと代議制の確立と云う程度のことではなからうか。

「滞仏陣中記」と「マインツ攻囲」とでは、同じゲーテの革命観を窺う場合でも、その手記の成立動機乃至は背景が異つている点よりすれば、同様に扱えないのは勿論であり、革命乃至は革命観に関するゲーテの論説に革命の現実に於ける推移が微妙に反映しているのは確かであるが、どの程度の理解を持つてゐるかは立証し得ないと云う他はない。少くとも体系的な認識或いは史的展望を求めるのは不可能である。

しかし、ゲーテは「詩と真実」に於いて、吾々の想定し得たものとは別箇の見解を表明しているのである。それによると、⁽²⁶⁾「しかし、なほ一層世間が熾烈な興味を寄せたのは、一民族全体が自己解放の氣勢を示したときであつた。すでに以前、小規模ながら同じ一場の劇が喜んで傍観せられたことがあつた―今や、しかし更に遠く離れた大陸に於いて、類似の事件が繰り返えされていくと云う話であつた。吾々はアメリカ人を祝福した。フランクリンやワシントンの名が政治や軍事の天空に燦然と輝き初めた。すでに種々のことが、人類生活を安樂ならしめるために行われていたが、特に今慈悲深いフランスの新王までが、多くの陋習の一掃と最も高貴な目的遂行にのみ専念し、間違ひなく有効な財政政策を採用して一切の専横な権力を放棄し、秩序と法規によつてのみ統治しようとする」と云う最善の意図を明らかにするに及んで、

至つて決活な希望が全世界に伝播し、信じ易い青年たちは自分及び同時代の人々に、美しいむしろ燦然たる将来を期待してもよいものと信じたのであつた。私はしかし、かう云う諸般の事件に対してただ社会の大部分が興味を感じた程度にしか関心を持てなかつた。私自身及び私の狭い交遊仲間、新聞や近事に交渉を持たなかつた。吾々の目的とするところは、人間を知ることであつて、人類一般のことはむしろ成り行きに委せて置いた⁽²⁶⁾と述べられて居り、世俗の出来事や社会的変改には興味を持たず人間の考察のみが関心事であつたことが明白に披瀝されているのである。

ゲーテは、先きの手記によつて人間と世界の新しい時代の到来を確信し、革命の必然性を認めるざるを得ないとして、史的感觉の優れた云はゞ歴史人としての像を自ら印刻していたのであるが、この「詩の真実」に於いては、現実から離れた一観想主義者の立場をとつてゐるのに過ぎないのである。

ゲーテに拠れば、かくて革命は人間歴史に於ける一形態に過ぎず、積極的なドイツ国民国家の政治思想の形成には何らの媒介的な役割を果しているものではない。ゲーテの革命観が、更に消化されてドイツの国民国家の思想的源泉の一つになるには、当然一連のドイツ・ロマンチストの抬頭を待たなくてはならない⁽²⁷⁾。彼の革命観は主として現実の事態の推移の上に成立したものと云え、ドイツ的理想―ドイツ民族国家の統一―には未まだ働きかけるものではなく、彼の人間歴史を考察する場合の手段的のものでしかないのである。

註

- (1) Chuquet 以後の多くの軍事史家は戦争必然論の上に立つて居り、戦争が政治的紛争の一つの收拾手段であるとする考えが成立するのには、Aulard 以後のことである。(G. Lefebvre, *Révolution Française*, p. 120~7)
- (2) *Cambridge Modern History*, Vol. VIII, p. 408. 聯合國に決定的な戦意がなつことは明白であつた。
- (3) 以下の戦局の概観は、*Histoire de France Contemporaine*, Tome II, p. 261~31. 141~45 及び *Cambridge Modern*

History, Vol. VIII, p. 407~24 に拠る。

- (4) ヘルギー占領地の経営は九二年十二月末から九三年三月始めまででその経営は革命政治の実情が明らかにされるものとして多大の注目を浴びていたが、主としてアッシニアの流通と農産物の徴発とにより殆んど効果を挙げ得なかった。

(A. Aulard, Recueil des Actes du Comité de Salut Public, Paris, 1889~1923. Tome I, p. 289~290 尚、拙稿「シロンドの崩壊」(史学二十一ノ二) 参照。

- (5) Recueil des Actes, Tome VII, p. 127, 軍団食糧の供給が枯渇状態にあつたのは明白である。

- (6) 一七九二年八月十日のクーデターは、その社会的意義が多きことから七九年の革命に対比してルフエーヴルにより第二革命と呼ばれるに至つた。(G. Lefebvre, Révolution Française, p. 245~50)

- (7) G. P. Gooch, Germany and French Revolution, p. 392~3. イギリスの評価は九三年一月のルイ十六世処刑を機に決定的に変つたとされているが、革命戦争それ自体は英仏両国の経済闘争の十八世紀的展開とも考えられる。

- (8) フランス、パトリオティズムの展開はカルノーを俟つてからであらうとする考えもあるが、カルノーのみにさう云い得るかどうか疑問の余地なしとはいえない。(桑原武夫訳、フランス革命の研究、四六頁―八三頁)。尚、カルノーに関しては、Corrèspondance Générale de Carnot, Tome II, p. 2~3 及び拙稿「ラザール、カルノー断考」史学(三十二ノ一、二二参照)。

- (9) ゲーテのフランス革命に手付した作品には、

Der Groz Kopita, Der Bürgergenial, Die Aufgeregten, Herman und Dorothea, Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten, Die natürliche Tochter, Reise der schöne Megaprazons, Das Mädchen von Oberkirch 等を数えることが出来るが、殆んどこの作品は、革命に対する単純な好悪の念によつて支配されて居り、恐嚇政治には最も反対の意向が示されてゐる。(小牧健夫訳・滞仏陣中記、マインツ攻囲一頁―三頁、菊地栄一訳、ゲーテ・シルレル書簡集四〇頁―五一頁参照)。

- (10) G. P. Gooch, Germany and the French Revolution, p. 392~3.

- (11) A. Aulard, Études et Leçons sur la Révolution Française, Tome III, p. 106~37.

- (12) G. P. Gooch, Ibid., p. 176~7.

(13) Cambridge Modern History, p. 251~458, 参照。

十八世紀の戦争では、七年戦争を除き、決定的な戦闘はない。勝敗は、常に戦力の誇示とその外交上の利用の仕方によって定まる。

(14) 此の戦闘はフランス軍の勝利ではなかった。それにもかかわらず、これはフランス軍の勝利なのである。(G. Lefebvre, *Revolutions Française*, p. 266~7)

(15) Goethes Werke (H. Kurz 編), VI, p. 7.

(16) Ibid., VI, p. 28.

(17) G. P. Gooch, *Germany and the French Revolution*, p. 182.

(18) Goethes Werke (H. Kurz 編), VI, p. 15.

(19) Aulard, *Recueil des Actes*, Tome IV, p. 505~7, Tome V, p. 15~7.

(20) Aulard, *op. cit.*, Tome V, p. 5.

(21) Aulard, *op. cit.*, Tome IV, p. 493.

(22) Aulard, *op. cit.*, Tome V, p. 239.

(23) Aulard, *op. cit.*, Tome V, p. 301.

(24) Goethes Werke, Bd VI, p. 177.

(25) ジャコブソンとサン・キュロットとの提携により、社会民主主義的改革が議会的領域に於いて可能になった意味に於いて、斯様に云うのも許されるであらう。尚、Lefebvre, *Ibid.*, p. 329~42. に拠れば、両派の争は戦争及び国際政治の動きと密接な関係があるように考えられる。

(26) Goethes Werke, Bd. 9, p. 60~7.

(27) マイネッケ、矢田俊隆訳(ドイツ国民国家発生の研究)三七頁―四七頁参照。